

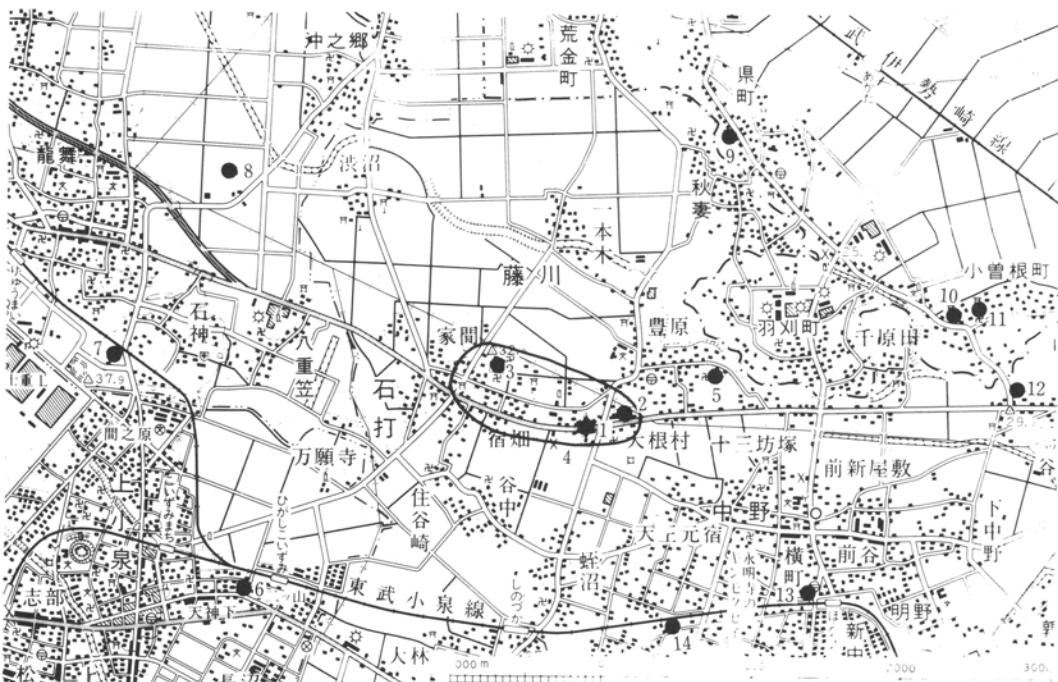
邑楽町松本23号古墳出土の象嵌装大刀

村岡泰子・関邦一・徳江秀夫

1 はじめに

邑楽町は、平地林とかつて「東毛の穀倉地帯」と呼ばれた田園に囲まれた都市化の進む地域である。町内の北西域に広がる平地林（雑木林）のなかに点在する古墳は松本公園として保存整備が進んでいる。しかし、国道122号沿いでは、地域開発のため1985(昭和60)年、毘沙門古墳、1987(昭和62)年、松本古墳群内住居址、そして、1989(平成元)年、松本23号古墳と記録保存を目的とする発掘調査が実施された。それぞれ報告書が刊行され、遺物は教育委員会に保管されている。ここで取り上げる松本23号古墳出土の大刀も、1989(平成元)年5月に発掘され、鋸落とし等の処理後実測した。『松本23号古墳発掘調査報告書』⁽¹⁾に登載後は、邑楽町教育委員会で保管・管理していた。しかし、鋸の進行が著しいため、1994(平成6)年、群馬県埋蔵文化財調査事業団に保存処理を依頼した。

群馬県埋蔵文化財調査事業団では関邦一が保存処理の事前調査として金属製品のX線撮影を実



- | | | | | |
|-----------|---------|-----------|-----------|-------------|
| 1 松本23号古墳 | 2 毘沙門古墳 | 3 八王子神社古墳 | 4 松本古墳群 | 5 松本24号古墳 |
| 6 大泉二ツ山古墳 | 7 間之原遺跡 | 8 塚廻り古墳群 | 9 県天王山古墳 | 10 小曾根浅間山古墳 |
| 11 永宝寺古墳 | 12 雷古墳 | 13 横町古墳 | 14 浅間神社古墳 | |

1図 松本23号古墳の位置と周辺の古墳 (1/50,000)

施したところ1振りの直刀に付属する鉢、鍔、柄縁金具と単体で出土した円頭状金具の4点に象嵌が施されていることを確認した。⁽²⁾

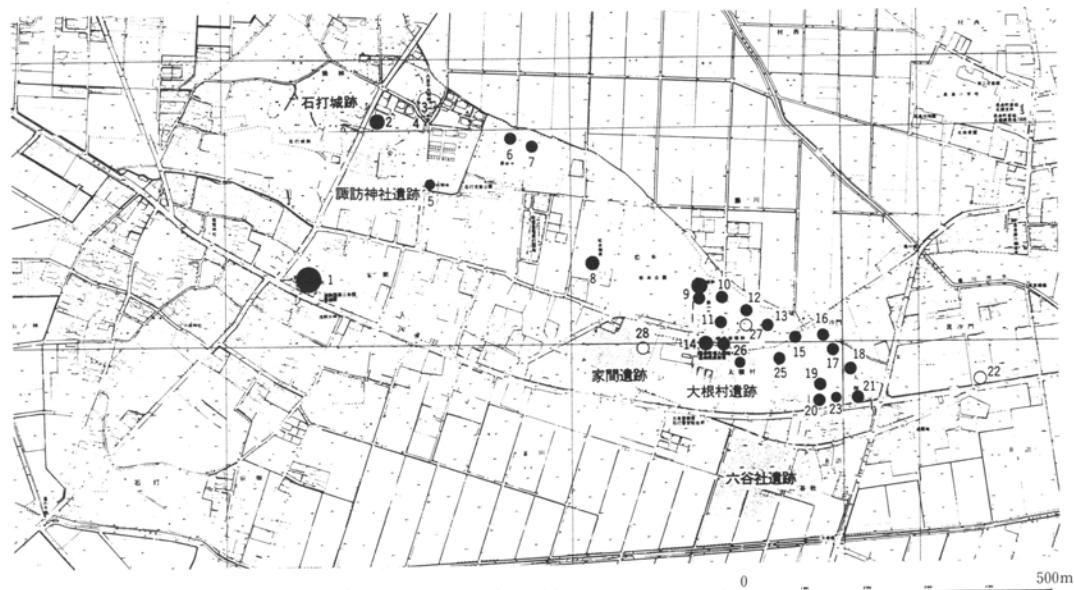
一方、徳江は、群馬県内の装飾付大刀の集成をおこなった際に報告書の記載内容により松本23号古墳から方頭大刀が出土していたことを確認していたが、事業団における保存処理の過程での大刀を間近で検討する機会を得、それが方頭大刀の柄頭でなく円頭状金具であることを知った。⁽³⁾

保存処理作業後、これらの資料を事業団から邑楽町教育委員会に返却するにあたり、村岡、関、徳江により本資料の再報告の必要性が認識された。そこで今回、邑楽町教育委員会の許可のもとここに資料紹介をおこなうこととなった。執筆は1・2を村岡が、3・5・6を徳江が、4を関が分担した。

なお、1996(平成8)年2月17日、明治大学大塚初重教授は、「邑楽町からみた日本古代史」と題する講演で、この銀象嵌装大刀について触れられ、佩用した人物については邑楽町一帯を6世紀代に統括していた地域集団の長であること、また、この大刀が当時としては一流の持ち物であると述べている。⁽⁴⁾

2 松本23号古墳について

本古墳は、邑楽郡邑楽町大字中野字大根村1310、国道122号沿で大根村交差点より100m西に位置する。また、本古墳より東に松本21号古墳(オオヤマザクラの巨木が墳頂に生えている)、西に松本20号古墳があり、いずれも円墳である。このほかにも付近に円墳があり、現存するものは24基である。1938(昭和13)年刊行の『上毛古墳綜覧』では41基が数えられ、松本古墳群と呼ばれている。⁽⁵⁾



2図 松本古墳群における古墳分布

松本古墳群は、北辺部が高く南東方向に傾斜する石打台地に立地する。その台地の東西約1km、南北300mの範囲に古墳は分布している。発掘調査が行われたのは、毘沙門古墳、松本23号古墳である。

毘沙門古墳は削平が著しく、原形をとどめず、調査時にも墳形を確認することができなかった。しかし、『上毛古墳綜覧』には旧中野村毘沙門所在の旧中野村1号墳毘沙門山という前方後円墳の記載がある。この中に墳頂に毘沙門天の石祠が祀られていることの記述があることからこの古墳が発掘調査された古墳にあたるものと思われる。毘沙門古墳は、前方後円墳であれば全長70mほどの規模を有していたと推定される。なお、周辺にこの他にも前方後円墳の存在したことを裏付けることとして、車塚、琵琶首の小字名が残っている。

この古墳の石室は、南に向かって開口する横穴式石室で、河原石を積み上げ、粘土と小礫で補強し、その外側を粘土で覆ったものである。玄室の平面形は小判形をしていた。

出土遺物は、石室から金銅製耳環4個、水晶製切子玉4個、碧玉製管玉1個、土玉1個、ガラス製小玉141個である。⁽⁶⁾この古墳の年代は、これらの遺物構成から7世紀前半の頃と考えられる。

松本23号古墳は、古墳群の東寄りで『上毛古墳綜覧』では中野村12号墳、大キサ40尺、高さ7尺3寸の円墳となっている。調査時は直径約12m、高さ1.8mであった。

内部主体は南に向かって開口する横穴式石室で、石室の平面形は小判形である。石室の幅は、西側に残った3列2段の石組から約1.4mと思われる。長さは、奥壁の1段だけ残った細長い横方向に据えつけられた石より約4mと考えられる。石室を構築する石材のほとんどが抜き取られていたが、毘沙門古墳と同じく、細長い河原石を小口に積み上げて粘土と小礫で補強し、裏込めは小礫を用い粘土で外側を覆う方法がとられていた。このような石室構造は、松本古墳群に一般的にみられる形態で、地理的要因が背景にあったと思われる。

石室からは大刀2振り、鎧、円頭状金具、金銅製耳環、鉄鎌が出土した。遺物は、盗掘をまぬがれた石室奥壁寄りの西側だけに集中して出土した。大刀は2振りが並べられた状態で切先を奥壁に向けて出土した。さらに掘り進めると、北壁寄りで耳環が出土した。墳丘の表土からは、埴輪片、須恵器片、土師器片を採集した。築造年代は、これらの遺物構成から毘沙門古墳よりも古く6世紀末と考えられる。

以上の調査古墳の他に、1967（昭和42）年に牛舎建設で破壊された松本29号墳（旧高島村2号墳）から大刀5振、鎧2、刀子2、鉄鎌2、耳環片、須恵器片が出土している。松本10号墳（旧高島村6号墳）からは銀環の出土が伝えられている。また最近では慶徳寺裏の古墳より人物埴輪⁽⁷⁾が出土した。八王子神社古墳からは太田天神山古墳のものと類似する埴輪が採集されている。

現時点で松本古墳群に関して得られる資料内容は極めて断片的なものである。その中にあって、毘沙門古墳や八王子神社古墳などの前方後円墳の存在は、本古墳群が重層的な群構成をなすものであったことを示している。また、その形成の開始は5世紀中頃にまで溯ることが考えられる。今後は、古墳群の保存に努めるとともに、その内容について詳細な検討を続けたいと考えている。

3 松本23号古墳出土の象嵌装大刀の概要

松本23号古墳の石室からは前項に記述したように2振りの大刀（大刀1、大刀2）が検出されている。そのなかの1振りが今回紹介する象嵌装大刀（大刀2）である。

大刀1（3図-1）は遺存状態が不良で現状では切先部分が刀身から遊離している。残存長は茎部から刀身に至る破片の長さが84.5cm、切先部分の長さが7.1cmで合計91.6cmとなっている。茎部の長さは11.8cm、茎尻に向かってその幅を狭めている。茎尻から1.4cmと7.8cmの二箇所に目釘穴が穿たれている。関は片闊である。刀身は茎部と比較してその幅が著しく大きくなり、柄寄りで幅3.3cm、厚さ7mmを測る。切先近くでは幅2.8cm、厚さ5mmである。断面は二等辺三角形を呈する。この大刀に伴うと考えられる無窓鍔が出土している。平面形は倒卵形を呈する。長径8.1cm、短径7.2cm、厚さ3mmを測る。

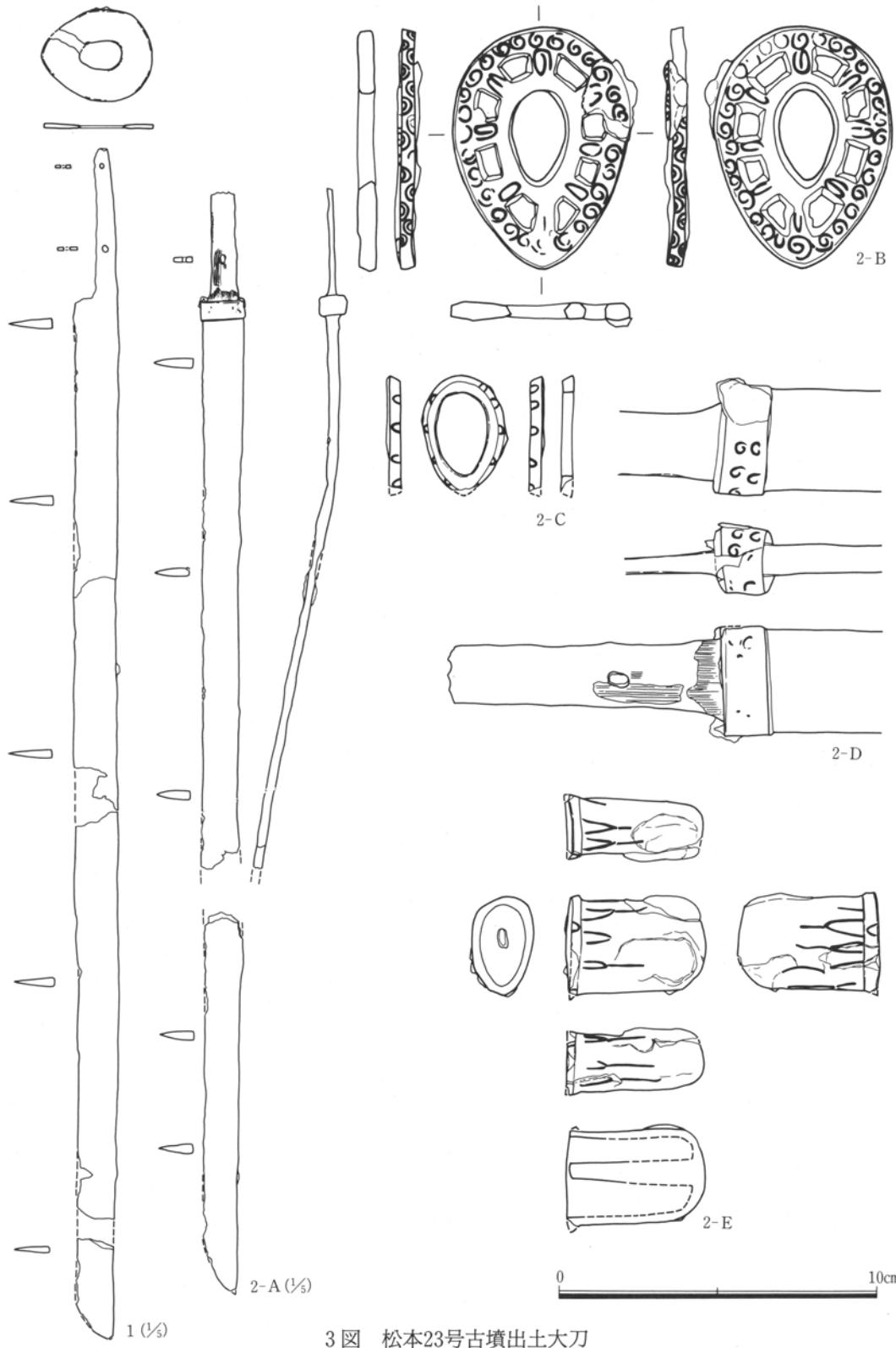
大刀2（3図-2）は保存処理の経過報告にもあるように出土時には刀身と鉢、鍔、縁金具が接着した状態で出土した。刀身（3図-2-A）は途中で欠損し2片となり、直接接合する箇所はない。茎部を伴う破片は鉢から切先寄り13.5cmの箇所で佩表側に折れ曲がっているが残存長は53.6cmを測る。切先側の破片は長さ31cmほどの長さである。茎部は長さ8.6cm、幅は1.7～2.2cm、厚さ4.5mmである。茎尻から5.4cmの箇所に目釘穴が穿たれている。関の部分は鉢の装着と木質の残存、接着が重なり判然としないが両闊であると思われる。刀身の幅は3.2cm、棟の厚さは7mmである。切先側では刀身の幅が2.7cm、厚さ7mmを測った。切先はあまりふくらみを持たない。

鉢（3図-2-D）は、幅1.4cmの鉄板を断面倒卵形の筒形に曲げて作られている。長径3.4cm、短径2.7cm、厚さ2.5mmである。現状では刀身とはやや斜めにずれて固定されている。側面に象嵌が施されている。文様はC字状の小さな渦文で縦に2列配されている。佩裏側で5単位の残存が確認できる。佩表側は器面の残存が悪いためその一部が確認されるにすぎないが、原状では佩表・裏の両面に同様の文様構成が配されていたと推察される。

縁金具（3図-2-C）は外縁の刃側の一部を欠損するが長径3.6cmが残存し、原形3.8cmが推定される。短径は2.7cm、厚さ2.5mmを測る。側面には柄側に頂部を向けた半円文の象嵌文様が9単位確認される。

鍔（3図-2-B）は長径7.5cm、短径5.6cm、厚さ4mmを測る。平面台形の窓が8箇所に配されている。錫化が進行する中、歪みが生じ、形状がやや反り返っている。また、平の柄側（鍔表）上部、時計でいうところの2時の方向は原形を大きく損ね、器面の一部がかさぶた状になっている。

象嵌は平の表裏両面と周縁部、耳の部分に施されている。平の表面には周縁と窓の間に「の」の字状の渦文が充填されている。その大きさにはややばらつきがあるものの径5～6mmほどで、これが27単位確認され、1単位分が剥落して空白部分を作っている。また、窓と窓の間隙には4箇所に縦長につぶれた渦文が、3箇所に楕円形の文様が描かれている。裏面の文様も表側同様の渦文で30単位配されている。窓と窓の間に渦文が配されることも表面と同様である。耳は一部が



3図 松本23号古墳出土大刀

剝落しているものの、二重の半円からなる文様が交互に連続して配置されている。

円頭状金具(3図-2-E)は長さ4.5cm、断面倒卵形で開口部分の長径は3.1cm、短径は1.9cm、厚さ2~3mmを測る。頂部は丸みをおびているが鎔膨れのため原形が著しく損なわれている。開口部の端は幅4mmほどが縁金具を付けたように肥厚している。内部には長さ3.8cm、幅4mmほどのやや扁平な棒状の突起物が残存する。X線透視でも判然としないが頂部から開口部に向かって打ち込まれているようである。目釘の一種と考えられる。

象嵌は開口部端の肥厚部分に半円文が配されている。残存するのは佩表・裏あわせて4単位であるが、原形では一周していたものと思われる。側面本体には羽状文が8単位残存していた。長さ1.2mmの山形文1段とその先端から延びる直線文を組み合わせたものである。

以上が松本23号古墳出土の象嵌装大刀の概要である。次に本資料に類似する資料をあげておきたい。

鍔の象嵌文様で平に渦文、耳に左右交互に二重の半円文を配する事例としては、東京都多摩川台古墳群第9号墳例(6世紀末)、愛知県東禅寺2号墳例(6世紀後半~7世紀初頭)、兵庫県沢の浦坪2号墳例(7世紀前半)⁽⁸⁾が管見にふれたものとしてある。特に、多摩川台古墳群9号墳例は窓間の渦文が縦長に崩れている点が本資料と類似している。

円頭状金具についてはこれと同様の袋状を呈する刀装具に対し小型の円頭大刀柄頭とするのか鞘尻金具とするのか部位の判定に見解が分かれることが多くみうけられる。その中で瀧瀬芳之氏は木質柄頭の存在、刀装具の中における鞘尻金具のもつ機能、象嵌装の事例における文様配置のあり方などをあげて鱗状文や羽状文が施される円頭状金具は原則として鞘尻であるとの見解を示⁽⁹⁾している。現時点ではこの点について詳細な検討を加えるだけの用意がないが、ここでは以下の点を加味して瀧瀬氏の見解に従い、この円頭状金具を鞘尻金具と推定して以下の記述を進めたい。一つは出土状態についてである。本事例の場合も刀身からは遊離しているが調査時の所見によればこの鞘尻金具の出土位置が刀身の切先寄りからである。もう一つは刀身の切先寄りの幅2.7cmが、鞘尻金具の端部の内面の長径2.5~2.6cmをやや上回るが、この金具が鞘木の端部に装着されたとしても鞘木の形状全体のバランスを損なうものではないと思われることからである。

次にこの鞘尻金具のもつふたつの特徴について類例を上げ、今後の比較検討の準備をしておきたい。

まず、象嵌の文様構成であるが、羽状文を配する事例は県内の集成の内容を後述するが同様の事例は見られない。他地域の事例としては長野県本郷大塚古墳出土柄頭(6世紀後半~7世紀前半)、京都府湯舟坂2号墳出土柄頭(6世紀後半~7世紀初頭)⁽¹⁰⁾の2例が開口部端部が肥厚しそこに半円文を配置し、側面本体には羽状文をモチーフとする点が共通する。また、岐阜県宮之脇遺跡第2号墳出土鞘尻金具(6世紀末~7世紀初頭)、三重県平田14号墳出土鞘尻金具(6世紀末~7世紀初頭)は端部の半円文は存在しないものの羽状文の配置された類似例としてあげができる。

また、頂部から開口部に向かって目釘の打ち込まれた事例としては前述の本郷大塚古墳出土柄頭、湯舟坂2号古墳出土柄頭、宮之脇遺跡第2号墳出土鞘尻金具の他に、京都府高山12号墳出土柄頭（6世紀末～7世紀初頭に初葬）、鳥取県郊家平1号墳出土柄頭（6世紀末）、千葉県吉高山古墳出土柄頭（6世紀後半）、京都府二見谷古墳群4号墳鞘尻金具（6世紀後半）、高知県大谷古墳鞘尻金具（6世紀末）⁽¹¹⁾の8例が知られる。うち郊家平1号墳例までの5例は象嵌装である。いずれも長さが5cm以下の小型品である。郊家平1号墳例はこの釘の他に側面に目釘穴が設けられ、目釘が残存している。しかし、8例とも刀身からは遊離した状態で出土しており、刀身本体にどのような状態で装着されていたのかは不明である。が、小型の円頭大刀柄頭あるいは丸尻の鞘尻金具には、側面から目釘を通して柄木あるいは鞘木と装着する方法の他に頂部から打ち込んだ目釘により鞘木に留める方法があったことが確認できる。

4 金属製品の保存処理について

保存処理実施および象嵌発見の経緯

本資料は平成元年発掘調査で発見され、不要な土・錆を除去し温風恒温乾燥機にて乾燥したのち、透明アクリルの展示ケースにシリカゲルと共に収納保管されていた。

これら遺物のうち、大刀・鍔・柄頭・鉄鎌について錆の進行が著しいため、邑楽町教育委員会の依頼により当事業団において、保存処理を実施することになった。

保存処理の作業にともない、事前調査としてX線写真撮影を実施したところ、前述の鉄器類のうち1振りの大刀に付属する鍔・鉢・柄縁金具と、単体で出土した鞘尻金具の4点について、象嵌が検出された。象嵌は白色で銀と考えられるが細かい成分については、分析を行っていない。

これらの鉄器は、錆に覆われているため、X線写真を参考にして錆を除去し象嵌を表出し、錆がこれ以上進行しないように、保存処理作業を実施することとした。

処理前の状況



写真上 大刀1 写真下 大刀2

大刀ー1

大きく9破片に割れている。瘤状の錆が大きく付着し、大刀表面が薄く剥落する部分が多数あ

り早急に処置を施す必要がある。

切先から茎まで残存するが、切先の破片は刀身と直接接合出来ない。

大刀一 2

大きく3破片に割れている、切先側の2破片と茎側の破片は直接接合しない。出土状態の記録から、本来は接合関係にあったが、この部分に大きな錆瘤の痕跡があり錆瘤が崩壊し接合が曖昧になつたものと考えられる。



大刀 2 刀身 錆 PH 測定場所(矢印部)

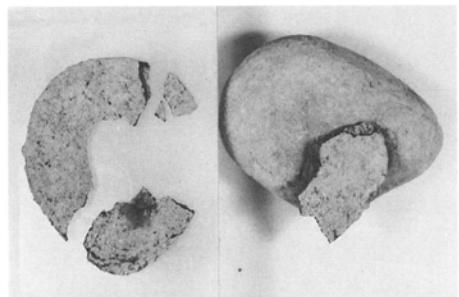
錆による表面の剥落が多く、非常に危ない状態である。ちなみに剥落した跡の粉状の錆を少量サンプリングし2ミリリットルの純水を滴下しPHを測定したところPH2.4であった。この錆部分に空気中の水分が凝集した場合、強い酸性のため劣化が急速に進む恐れがあり早急な処置が必要である。

この大刀には、八窓の锷・鉢・柄縁金具が付属、大刀本体に錆着いている。

锷

単独で出土した無窓の锷で3つの破片と2つの小破片とからなる。石室の玉石に錆着いた状態で出土している。破断面に錆汁の痕跡が有り、これを採取し純水1ミリリットルに溶かしPHを測定したところPH3.4をしめした。大刀一 2 より酸性の程度は低いものの、早急な処置が必要である。

大刀一 2 には锷が付属することから、大刀一 1 に付属する可能性があるが詳細は不明である。



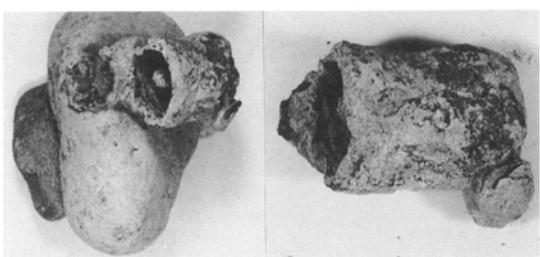
锷 処理前

鞘尻金具

報告書では柄頭として掲載されている。

石室の玉石に錆着いた状態で出土する。

内部に舌状の突起があり、解放部(口元)から20ミリ程度木質の痕跡が有るが奥まで到達していない。



石付着状態

石をはずした状態

保存処理作業

X線透過写真

鉄器類のうち、象嵌等の可能性のある資料（鍔、鞘尻金具、柄縁金具、鉗）について、X線透過写真撮影を実施した。

X線装置 ソフテックス M-1005特

管電圧 資料の状態により60～90kvp

管電流 3mA

照射時間 3min

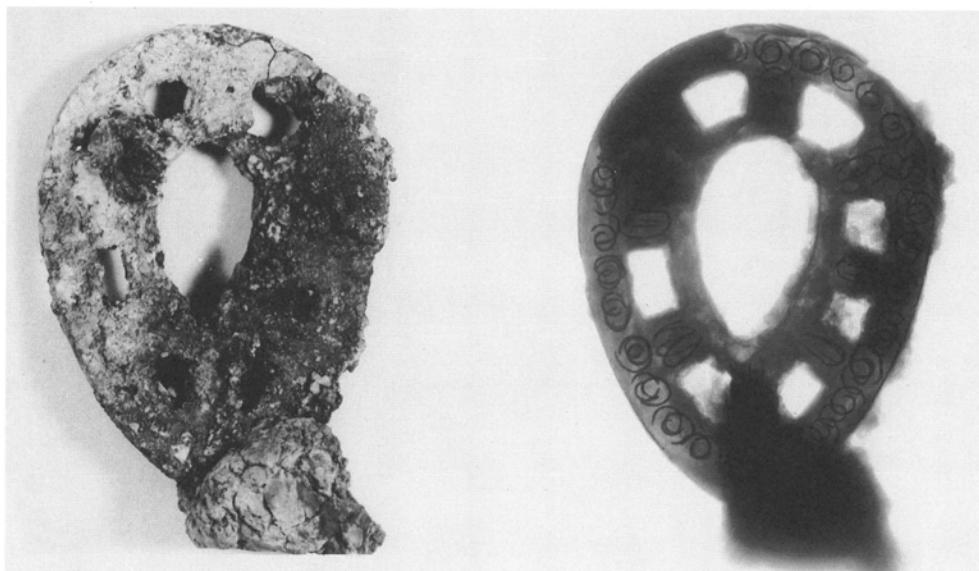
撮影距離 30cm

使用フィルム ポラロイド タイプ55

当事業団では、X線透過写真撮影に通常のソフテックス用フィルムの他に、ポラロイドフィルムを使用している。ポラロイドではサイズが小さく（4×5判）単価が高い（約300円／枚）・X線に対する感度が低く露出時間が長くかかる等の欠点がある。しかし自動現像機を備えていないところにとっては、暗室での現像液の管理不要で撮影後数分で画像を見られる利点をとり、撮影点数が少ない場合や至急X線透過写真を見たい場合に使用している。

X線写真的画像も使用に耐える程度である、鍔についてはX線撮影をする位置を左右に10センチ程度移動し計2枚撮影し、実体視鏡にて観察して表と裏の象嵌の画像を分離した。

その結果（鍔）では、倒卵型八窓の鍔で外周に沿って右巻の渦巻きが巡り、窓と窓の間に「の」



大刀2の鍔 処理前

大刀2の鍔 X線写真（ポジ）

の字型の象嵌が、二重の半円（この状態では推定）が判別された。また、X線写真の細部を立体視鏡で観察したところ、肉眼的に見える錆瘤の表面にも象嵌が分布、錆瘤と本体との境では象嵌の線が断層のように分断され分布することが分かった。さらに、点検して行くと渦巻き模様が必ずしも鉄器表面にフラットに分布しているわけではなく、模様の一部が跳ね上がりついたり浮き上がっている所も見つかった。

本資料（鍔）では硬い錆の塊の下に象嵌が埋まっている部分、錆瘤の上に象嵌が乗っている部分、薄く覆われた錆の下に象嵌が有る場所と大まかに3つの状況が存在するものと推定され、それぞれにあったクリーニング作業が必要とされる。

保存処理を実施するに際し観察したところ、クラックや鉄器表面の剥落が著しく、剥落面には赤褐色粉状の錆が形成されている。これらの錆に押し広げられるように剥離していることから、これらの錆およびそれを形成させる要因が、本資料の劣化を促進していると考えられる。しかしながら、当事業団ではその錆自身の分析、塩化物に代表される鉄器に含まれている有害物質の分析を実施する設備をもたないため、便宜的に錆および錆汁のPHを測定したが、それでも明らかに鉄にとって有害な酸性値を示している。今後錆の分析を含め検討し、より良い状態に保存処理を実施して行きたいと考えている。

脱塩処理

破片が多く脆弱なため、各破片を不織布でくるみ50°Cにて予備乾燥ののち、LiOH0.1%エタノール溶液に1ヶ月半（途中液を1回交換する）つけこんだ。脱塩中に新たに黄褐色の錆が発生したため、液から取り上げアルコールで洗浄した後、エアーブラシにてクリーニングを行った。

象嵌の表出作業

プラズマ処理について

かねてより、東京国立文化財研究所青木繁夫氏らによりプラズマ処理による象嵌の表出方法が開発実施され報告されている。⁽¹²⁾

プラズマ処理を実施することにより、表層の錆が鉄地より剥がれ易くなり、針やメス等により除去が可能になるため、グラインダーやエアーブラシ等を使用した場合にくらべ、象嵌表面を傷つけにくく象嵌表面に残された情報をのこし易い。このことから、本資料の象嵌表出にあたり東京国立文化財研究所のご協力をえてプラズマ処理を行なった。

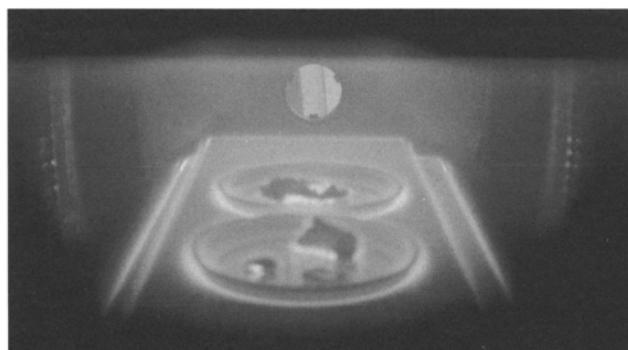
プラズマ処理と工程

第一回プラズマ処理

プラズマ処理条件

高周波周波数	13.56MHz
高周波出力	2 KW
処理温度	(200°C)
ガスおよび注入量	窒素 400ml/min 水素 400ml/min アルゴン 200ml/min
処理槽内圧力	約133Pa
処理時間	1 時間
処理対象資料	鍔・鍔縁金具・鉢・鞘尻金具 鍔は、半分に割れ片方は鍔とともに刀身からはずれたためプラズマ処理を実施、他の破片は刀身についたままのため資料の運搬の制約からプラズマ処理を実施しなかった。

プラズマ処理の結果、表面を薄く覆っている錆が剥がれ易くなり、実体顕微鏡下でメスを使って除去することが出来た。しかし表面を厚く覆っている硬い錆や、硬い錆瘤は除去することは困難であった。そのため、象嵌の表出できた部分については保護のため表面にパラロイドB-72を塗布し、硬い錆瘤はニッパにより出来るだけ除去したのち、再度プラズマ処理を行った。



プラズマ処理中



プラズマ処理後の鍔

第一回プラズマ処理の状況をふまえ、若干条件設定をかえながら同様の工程で第二回・第三回のプラズマ処理を行い、象嵌表出作業を進めた。

第一回のプラズマ処理で表出来た部分は象嵌の遺存状態も良く、象嵌の表面の情報を抽出することができた。

これに対し、第一回めのプラズマ処理では表出来なかった部分については、象嵌を覆っている錆が黒色緻密で地金および象嵌表面への密着が良く、二回・三回とプラズマ処理を行ってもクリーニングには労力を要した。ピッキング等で表面の錆をとばし除去することができず、表面の

鏽を除去するためのメスが滑って象嵌の表面を傷つける恐れが出て来た。そのため、表面全体にパラロイドB-72の15%アセトン溶液を塗布し表面を保護、そのあと樹脂の塗膜と共に鏽を切除した。象嵌の部分は残し、先に地金部分を除去し最後に象嵌の上の塗膜をそっと引きはがした。このとき樹脂の塗膜に鏽が付着した状態で剝がれ、象嵌の表面に僅かに残った鏽の除去に僅かながらも効果が有った。しかし象嵌と地金の密着が悪い部分については、樹脂とともに象嵌が剝がれそうになる部分が稀に見られた。この場合は、樹脂をアセトン等で溶解し除去することとした。今回の処理では、遠隔地の処理設備をお借りしての作業のため処理回数に制約があったが、遺物の状況にあわせて、こまめにプラズマ処理を行うことにより、より良い状態での象嵌の表出が可能になるものと考えられる。

表出作業後の象嵌資料は下記の工程で処理を進めた。

表面洗浄

エタノール（99.5%）にて洗浄

乾燥

送風恒温乾燥機にて40°C～80°Cまで順次温度を上げ乾燥を実施する。

樹脂含浸

パラロイドB-44 15%キシレン溶液につけこみ、真空デシケーターにて減圧状態(20mHg)で2時間、常圧にもどして20時間含浸する。

仕上げ

破片を瞬間接着剤（アロンアルファー）およびエポキシ系接着剤（アラルダイトラピット）にて接着、破片の剥落部分および大きいクラックにはエポキシ系接着剤を充填した。樹脂含浸をしたもののは鉄器本体の強度が不十分であること、接合が出来ない部分があることから接着はひかえ、アクリルケースに収納し、邑楽町教育委員会に返却した。

5 群馬県出土の象嵌装大刀の様相

群馬県内において刀装具に象嵌が施された事例は附表に集成したとおり、51例である。その内訳は素環頭大刀刀装具1例、円頭大刀柄頭11例、頭椎大刀柄頭1例、振り環頭大刀装具1例、鞘尻金具3例、锷28例、縁金具3例、鉢14例、刀身5例となった。以下、その概要を記す。なお、これらの象嵌の材質はそれが判明しているものは東京国立博物館蔵の金錯銘大刀を除くその他は銀である。

(1) 素環頭大刀

伊勢崎市台所山古墳出土の環頭大刀の装具に銀象嵌が施されている（4図）。柄頭の環径は7.2cmを測る。外環の一部に象嵌が確認できるが器面の剥離が著しく文様構成を把握することは困難とされる。锷は長径6.5cmで、一側縁に長方形の孔を開けている。平に蕨手文を連続させる。柄元

金具、鞘口金具には3本線による亀甲繋文を区画し、単鳳文と花文を配している。鞘尻金具には鋸歯文と波頭文を交互にくり返す連続文を施している。⁽¹³⁾亀甲繋鳳凰文の編年を検討した橋本博文氏は、本事例にみられるモチーフを国内における亀甲繋鳳凰文のうち区画内に単鳳を配する文様系譜の起点と考えるとともに、製作年代を6世紀初頭以前においている。⁽¹⁴⁾

(2) 振り環頭大刀

高崎市綿貫觀音山古墳出土の振り環頭大刀（附表2）の鞘口金具と鞘尻金具に銀象嵌の龍文が施されている。二頭の龍が相対する向きに描かれているが、写実性は全く損なわれており、象嵌文様をにわかに龍と認識することが困難となっている。同様の龍文を施す振り環頭大刀の事例として三重県井田川茶臼山古墳例、大阪府河内愛宕塚古墳例、静岡県明ヶ島15号墳例が知られ、龍文の型式学的な検討から文様の変化が井田川茶臼山古墳—河内愛宕塚古墳—綿貫觀音山古墳の順番であることが指摘されている。⁽¹⁴⁾綿貫觀音山古墳例は古墳の築造年代、その他の共伴遺物の検討からも6世紀後半の早い時期の年代が付与されるものと考えられる。

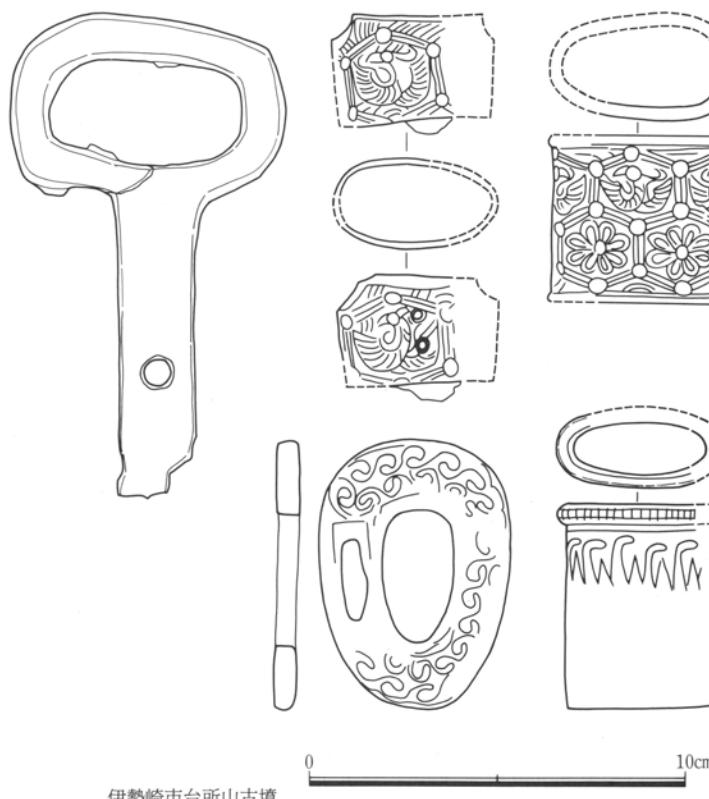
(3) 頭椎大刀

藤岡市新領塚古墳から柄頭（附表3）の出土が報告されている。詳細は報告書の刊行を待たねばならないが、2本線による亀甲繋文による区画内に鳳凰文が配されているという。群馬県では

唯一の事例であり、全国的にも17例が確認されるのみ⁽¹⁶⁾という。古墳から埴輪が出土していることから古墳築造当初の副葬品であれば6世紀後半の製作年代が推定される。

(4) 円頭大刀

円頭大刀は全国で87例が⁽¹⁷⁾集成されている。亀甲繋鳳凰文を施す柄頭を有するものと小型の柄頭のものに大別される。柄頭に亀甲繋鳳凰文を施した例は、群馬県では9例の出土が知られるが刀装具全体の拵えを知ることができるのは藤岡市平井地区1号古墳例だけである。この大刀は全長94cmを



4図 群馬県内出土の象嵌装刀装具（1）

測るもので、柄頭に2本線からなる亀甲繋文の区画中に単鳳文を配している。喰み出し鍔は平の両面にC字状文が、耳には平行線文が施されている。鉢の文様は鳳凰あるいは龍文の退化したものと考えられている。鞘間金具にみられる釣り手佩用の装置の存在等から6世紀後半の時期の所産と考えられる。

橋本博文氏は亀甲繋鳳凰文の変遷を検討し、6世紀初頭から7世紀前半の間に9段階の段階設定をおこなっている。橋本氏の考察によれば亀甲繋文内の意匠は鳳凰文（A類）と花文（B類）の2系統に大別される。鳳凰文は単鳳（A—I類）、双鳳（B—II類）に細別、さらに単鳳を配するものはハート形文から火炎文へ変容するもの（A—I—a類）と施文状文（A—I—b類）に退化するものに系統づけられるという。群馬県内出土事例ではA—I—a類の第3段階に板倉町筑波山古墳例（5図—1）が、第4段階に伝高崎市付近例（5図—2）が位置づけられている。A—I—b類では藤岡市本郷例（5図—3）、高崎市岩鼻例（5図—4）、新田町神明例（5図—6）⁽¹⁹⁾が第3段階とされている。新田町大根例（5図—5）は施文状文の系列の中にあって亀甲文内に双鳳が描かれる事例として第3段階とされている。それぞれの段階には第3段階が6世紀後半、第4段階が6世紀末の年代観が付与されている。平井地区1号古墳例は文様の退化が著しいが、橋本氏の第3段階に相当するのであろうか。

赤堀町綜覧赤堀村248号墳例（附表9）は文様の詳細が確認されていないが、長さ8.5cm、短径5.2cmと他と比較してやや大型であり注目される。

小型の事例としては赤堀町綜覧赤堀村40号墳例（附表10）があるが詳細は不明である。高崎市山名原口II遺跡2号古墳例（附表14）は長さ6.8cm山形の文様を3段重ねた鱗状文が施されている。ともに刀装具としての部位を検討する必要性があり今後の課題が残されている。

（5） 鞘尻金具

松本23号古墳例の他に2例が知られる。沼田市秋塚3号墳例（5図—11）は、長さ、5.5cmを測り、端部寄りに側面から目釘が打たれている。象嵌はハート形文あるいは火炎文の退化した文様が4単位めぐっている。佐波郡東村例（5図—12）は鱗状文が施された事例である。

（6） その他の刀装具

鍔に施された事例についても橋本博文氏の研究がある。⁽²⁰⁾ 橋本氏は5世紀から7世紀初頭にいたる間の資料について、文様の系列を唐草文系列、C字状文系列、ハート形文系列、渦文系列の4系列に分類し、それぞれを5段階に設定、編年をおこなっている。ここでは橋本氏の研究成果に従って県内の出土事例を整理しておきたい。

唐草文系列では前述の環頭大刀に伴う伊勢崎市台所山古墳例（4図）があげられている。

C字文系列では無窓鍔の伊勢崎市出土例（6図—2）を第2段階、6世紀中～第3四半期に、高崎市岩鼻例（6図—7）、筑波山古墳例（6図—1）、伝高崎市倉賀野例（6図—10、附表21）を第3段階、6世紀第4四半期としている。高崎市ローソク山古墳例（附表19）は8窓ではあるが文様構成は岩鼻例と共通する。伝高崎市倉賀野町付近出土例（附表20）は窓間の縦線区画の中



5図 群馬県内出土の象嵌装刀装具 (2)

がC字文2個になっている点が異なるが筑波山古墳例と類似するものと思われる。この2例も橋本氏の設定した第3段階の範疇に含まれると考えられる。

伝高崎市倉賀野町付近出土例（附表22）は12窓の間を弧線を同一方向に重ねたモチーフで充填しているが、これはC字文が退化したものと考えられようか。

ハート形文系列は3例が確認できる。いずれも無窓鍔である。橋本氏は伝群馬出土例（6図-4）を第4段階、6世紀末の時期に位置づけている。秋塚10号墳例（6図-6）は10単位のハート形文が配されている。文様間の樹枝状文は消失している。水泉寺3号墳例（附表36）は文様が著しく崩れている。両者は伝群馬県例より後出で、7世紀におよぶものと考えられる。文様の退化傾向から水泉寺例が最新に位置づけられると思われる。

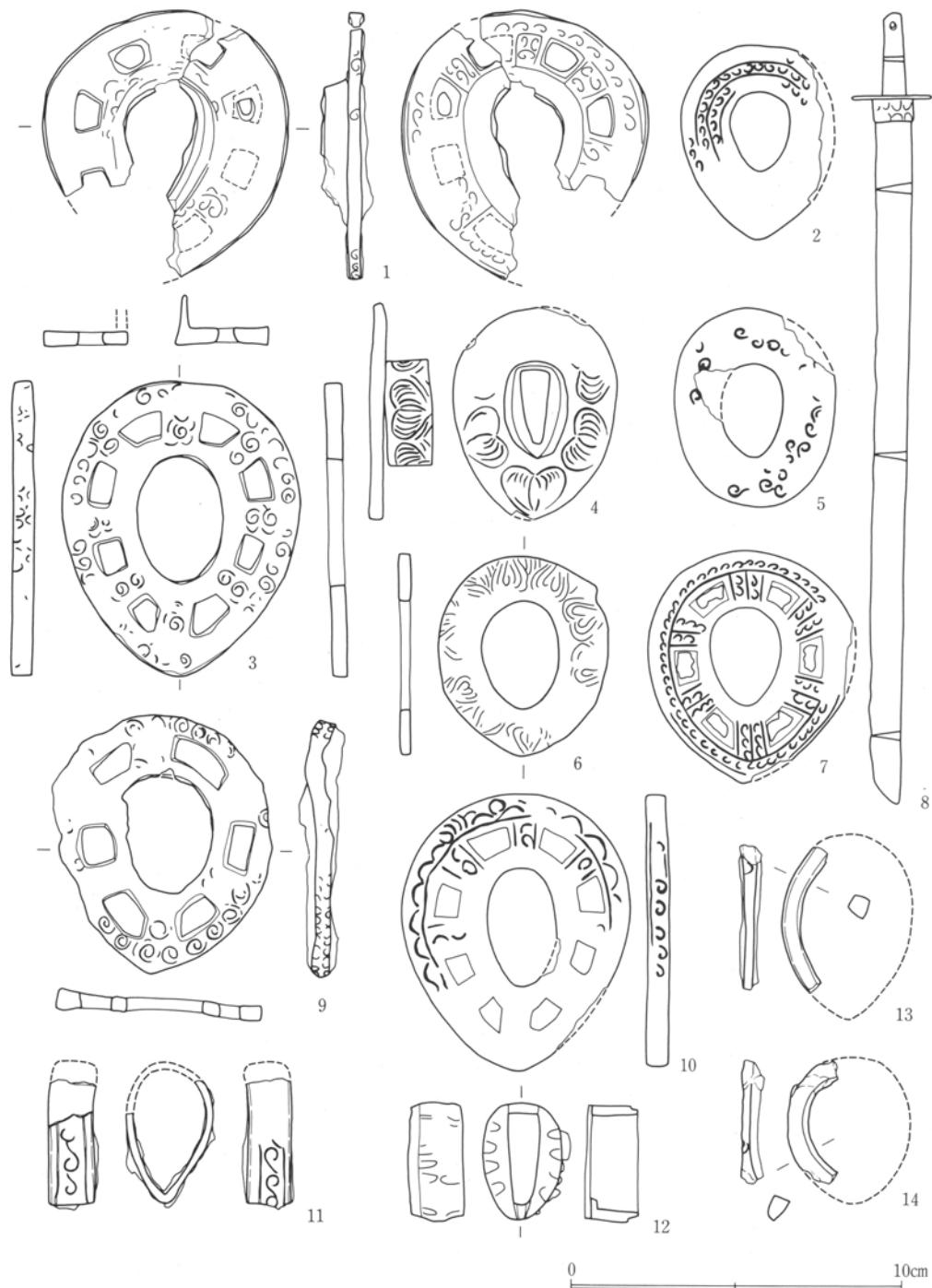
渦文系列は6世紀第4四半期にC字状文系列から分かれたとされている。橋本氏は無窓で文様配置の崩れた桐生市綜桐生市2号墳例（6図-5）を第5段階に位置づけている。松本23号古墳例（3図-2-B）、前橋市荒砥二之堰遺跡2号墳例（6図-9）、高崎市ローソク山古墳例（附表19）、吉井町ホウリウ塚古墳例（附表37）、北橘村八幡塚古墳例（6図-3）がこの系列にあたる。耳の装飾は松本23号古墳で二重半円文が、二之堰遺跡2号墳例と八幡塚古墳例で半円文が施されている。いずれも綜桐生市2号古墳例よりも文様構成は整ったものであるが荒砥二之堰遺跡2号墳、八幡塚古墳とも埴輪を伴わない古墳である点で大刀の製作年代と古墳の築造年代との間に若干の時間幅が生じる可能性も考えられる。

耳のみに象嵌を施す例は瀧瀬芳之氏により集成、検討が施されている。⁽²¹⁾ 県内の出土事例としては、山名原口II遺跡2号墳例（附表14）、高崎市倉賀野町大応寺例（附表23）、高崎市倉賀野町大道南例（附表24）、伝藤岡市三本木出土例（附表31）、渋川市石原付近出土例（附表32）、群馬県出土例（附表38）の5例があげられている。

鉢に象嵌の施された事例は14例が確認できる。文様構成が確認できるものとしては前述の藤岡市平井地区1号古墳例の他に富岡市上田篠古墳群2号墳例（6図-8）がある。側面に対向する位置に配置された2列の半円文が施される。北橘村八幡塚古墳例（6図-12）は鍔とセットをなすものであるが鉢の側面と塞ぎの板にやや縦長の半円文が配されている。伝群馬県出土例（6図-4）は鍔と同様のハート形文が4単位施されている。前橋市長久保古墳群7号墳例（6図-11）は端部を画する直線の間に勾玉形のC字状文が連続して配されている。

縁金具では少林山台遺跡7号墳例（6図-13）、少林山台遺跡14号墳例（6図-14）があるがともに残存状態が悪い。側面、耳に半円文が施されていたものと考えられる。

刀身に象嵌が施されていた事例は6例を数える。うち1例は伝群馬県出土の金錯銘文の資料（附表49）である。全長77.5cmの刀身の佩表に銘文4文字が施されているが現在では判読できない。カマス切先を呈し、7世紀の所産と考えられている。その他は鉢本孔周辺を飾ったものが4例ある。孔周囲の環文と連弧輪状文からなっている。高崎市綿貫觀音山古墳出土の頭椎大刀（附表2）、高崎市出土の2例（附表43・48）、板倉町筑波山古墳例（5図-8）例である。筑波山古墳出土の



- | | | | |
|------------------|------------------|------------------|-----------------|
| 1 板倉町筑波山古墳 | 2 伊勢崎市旧殖蓮村 | 3 北橘村八幡塚古墳 | 4 伝群馬県 |
| 5 桐生綜桐生市 2号墳 | 6 沼田市秋塚10号墳 | 7 高崎市岩鼻 | 8 富岡市上田篠古墳群 2号墳 |
| 9 前橋市荒砥二之堰遺跡 2号墳 | 10 伝高崎市倉賀野町付近 | 11 清里長久保古墳群 7号墳 | |
| 12 北橘村八幡塚古墳 | 13 高崎市少林山台遺跡 7号墳 | 14 高崎市少林山台遺跡14号墳 | |

6図 群馬県内出土の象嵌装刀装具 (3)

刀身は同古墳出土の亀甲繋鳳凰文を有する円頭大刀柄頭と同一個体となる可能性のあるものである。橋本博文氏の集成により全国に10数例が出土しているという。畿内の工房で製作され、地方の有力豪族層に配布されたものと考えられている。⁽²²⁾

以上が群馬県内出土の象嵌装大刀等の概要であるが、これらの遺物の製作年代については単独で所蔵されるものが多くその編年的位置づけが困難な事例が多いが、台所山古墳出土の環頭大刀のように6世紀初頭以前の年代観が指摘されるものを除くとその大半は6世紀の後半、それもやや新しい時期から7世紀の前半の製作年代が想定される。このような状況は他の環頭大刀の諸例や頭椎大刀あるいは圭頭大刀などの装飾付大刀の盛行時期とほぼ重複している。

また、これら象嵌装大刀の出土する古墳の状況であるが附表でみると、出土古墳が判明した事例のうち前方後円墳からの出土はわずか2例（綿貫觀音山古墳、筑波山古墳）でその他20例は円墳からの出土である。出土古墳の状況については他の装飾付大刀においても前方後円墳からの出土事例の割合はそれほど高くない。例えば单龍・单鳳環頭大刀は9例のうち4例が、頭椎大刀は17例のうち8例が前方後円墳からの出土となっている。⁽²³⁾これらと比較すれば象嵌装大刀には7世紀代の事例が含まれるとしても中小規模の古墳の被葬者に保有されていた割合がより高かったことがうかがえる。

象嵌装大刀をはじめとした各種の装飾大刀の分布については6世紀から7世紀にかけて大和王権とその周辺勢力によって押し進められた中央集権体制の確立という動きを背景に、中央勢力から地方豪族、あるいは地域の有力者層に付与されたものとする考え方方が有力となってきている。そして、これらの大刀類の製作についても大和王権が一元的に統括していたとの見方が大勢である。柄頭の亀甲繋鳳凰文や鍔の文様にみられる系列の存在やその変遷過程のあり方からもこの考え方方に頷ける点は充分ある。ただし、そのなかにあって、柄頭や鍔の規格や象嵌文様の細部における表現方法に極めて多様な様相が存在するという事実からは、それらの製作や配布のシステムがどの程度確立されたものであったのかについて、今後も検討を要すると考えられる。

6 まとめ

本稿は、邑楽町松本23号古墳出土の大刀の保存処理作業の過程で象嵌が施されている事実が判明したことに対し、その資料的価値の重要性を認識し、改めて基礎資料の提示をおこなったものである。また、本資料を分析するための基礎作業とし、群馬県内の象嵌装大刀の集成をおこなった。分析作業はまだその途上であり、今後も資料の収集に心掛け本資料の正しい位置づけに努めていきたいと考えている。最後に本稿で確認した事実を列記して本資料の紹介を終えたい。

①本資料は邑楽町大字中根字大根村1310所在の松本23号古墳から出土したものである。古墳は径12mをやや上回る規模の円墳で横穴式石室を内部主体とする。円筒埴輪を伴うものと考えられる。

②象嵌は大刀の装具の内、鍔の側面、柄縁金具の耳、鍔の平両面・耳、鞘尻金具の側面に施さ

れていた。象嵌の材質は確認していないが視覚的な観察では銀象嵌と考えられる。

③鞘尻金具とした金具については、形状・規模などから小型の円頭大刀柄頭とする見方も有り今後も検討を必要とする。

④この鞘尻金具には鞘尻の頂部から打ち込まれたと考えられる目釘が認められる。同様に頂部から目釘が打ち込まれた鞘尻金具や柄頭は本例を含めて現在のところ全国で9例が確認される。

⑤鞘尻金具に施された羽状文の象嵌文様の類例や目釘を有する事例は、出土古墳や共伴遺物の様相からいざれも6世紀後半から7世紀前半の製作年代が想定される。また、鐔の渦文が橋本博文氏が指摘するように6世紀第4四半期にC字状文の系列から分離したという見解を参考にするならば本資料も年代の上限を6世紀第4四半期におくことができよう。これらを勘案すると松本23号古墳出土の象嵌装大刀の製作年代は6世紀の後半～末と考えることができる。

⑥松本23号古墳は松本古墳群を構成する古墳の中でも特別に傑出した規模、様相をもった古墳とは考えられない。象嵌装大刀を所有した本古墳の被葬者像については松本古墳群をはじめとした周辺地域の古墳の動向を検討する中で再度考える機会をもちたい。

本稿の作成にあたり、多くの方々にお世話をいただいた。東京国立文化財研究所修復技術部の青木繁夫、犬竹 和の両氏には本資料の保存処理にあたりプラズマ処理の依頼を快諾していただいた。

財埼玉県埋蔵文化財調査事業団の瀧瀬芳之氏、野中 仁氏には象嵌装大刀についての数多くの御教示をいただいた。特に目釘を打ち込んだ鞘尻金具の類例については瀧瀬氏の集成によるものである。

また、挿図の作成にあたっては佐藤元彦氏、須田育美氏、八峰美津子氏の協力を得た。あわせて感謝いたします。また、最後に、本資料の報告を本誌上におこなうことを承諾していただいた邑楽町教育委員会に対し深く感謝申し上げます。

注

- (1) 邑楽町教育委員会『松本23号古墳発掘調査報告書』1989
- (2) 関 邦一「松本23号古墳出土の象嵌大刀」「平成7年度調査遺跡発表会発表要旨」1995
- (3) 徳江秀夫「上野地域における装飾付大刀の基礎調査」「研究紀要」10 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- (4) 大塚初重『邑楽町よりみた日本古代史』邑楽町教育委員会 1996
- (5) 群馬県『上毛古墳綜覧』1938
- (6) 邑楽町教育委員会『毘沙門古墳発掘調査報告書』1986
- (7) 邑楽町教育委員会『邑楽町の遺跡』一高島・中野一 1988
- (8) 清水久男「多摩川台古墳群第9号墳出土銀象嵌装大刀」「大田区立郷土博物館紀要」第5号 1995
松村冬樹「名古屋市守山区東禅寺2号墳出土の銀象嵌遺物について」「名古屋市博物館紀要」第5巻 1982
兵庫県教育委員会『沢の浦古墳群』1987
- (9) 瀧瀬芳之・野中 仁「埼玉県内出土象嵌遺物の研究—埼玉県の象嵌装大刀—」「研究紀要」第12号 1995
- (10) 羽状文を配する事例については以下の文献を参照した。
須坂市教育委員会・本郷大塚古墳発掘調査団『本郷大塚古墳』1992
西山要一「古墳時代の象嵌一刀装具について」「考古学雑誌」第72巻 第1号 1986
岐阜県教育委員会・可児町教育委員会『宮之脇遺跡発掘調査報告書』1976

- 安濃町遺跡調査会『平田古墳群』1987
- (11) 鞘尻金具の頂部から目釘が打ち込まれている事例については以下の文献を参照した。
- 久美浜町教育委員会『湯舟坂2号墳』1983
- 増田孝彦「高山古墳群(12号墳)出土の象嵌をもつ刀装具」『京都府埋蔵文化財情報』第30号 京都府埋蔵文化財調査センター 1988
- 吉高山王遺跡調査会・印旛村教育委員会『吉高山王遺跡』1977
- 城崎町教育委員会『二見谷古墳群』1977
- 倉吉市教育委員会『郊家平古墳群発掘調査報告書』1988
- 高知県文化財団『大谷古墳』1991
- (12) 青木繁夫・犬竹 和「象嵌された遺物のプラズマによる保存処理について」「保存科学」34号 東京国立文化財研究所 1995
青木繁夫・犬竹 和「プラズマによる象嵌遺物の保存処理について」「平井地区1号古墳」藤岡市教育委員会 1993
- (13) 町田 章「環頭大刀二三事」「山陰考古学の諸問題」1986
- (14) 橋本博文「亀甲繋鳳凰文象嵌大刀再考」「翔古論聚」1993
- (15) 小林義孝・有井宏子「河内愛宕塚古墳出土の飾り大刀—龍文銀象嵌鞘金具付き捩り環頭大刀—」「研究紀要」第7号 1996
- (16) 瀧瀬芳之・野中 仁「象嵌遺物の保存処理」「考古資料保存研究会だより」1997
- (17) 注(16)文献
- (18) 9例の他に瀧瀬芳之氏は、「円頭・圭頭・方頭大刀について」「日本古代文化研究」創刊号 1984の中で「群馬県高崎市岩鼻町」出土例として円頭大刀柄頭を掲載している。これに対し橋本博文氏は、「伝群馬郡岩鼻村」出土例と同一の可能性があることを指摘している。この点については今回具体的な検討をおこなうことができなかつたので、一覧表への掲載は見合せた。
- (19) 注(14)文献
- (20) 注(14)
- (21) 注(9)文献
- (22) 注(14)
- (23) 注(3)文献

参考文献・引用文献

- 東京国立博物館『東京国立博物館図版目録』古墳遺物篇(関東II) 1983
- 町田章「環頭大刀二三事」「山陰考古学の諸問題」1986
- 群馬県立歴史博物館『藤ノ木古墳と東国の古墳文化』1990
- 小林義孝・有井宏子「河内愛宕塚古墳出土の飾り大刀—龍文銀象嵌鞘金具付き捩り環頭大刀—」「研究紀要」第7号 八尾市歴史民俗資料館 1996
- 橋本博文「亀甲繋鳳凰文象嵌円頭大刀、小刀及び鎧本を象嵌装飾する大刀と佩用者の性格」「板倉町史」考古資料編 1985
- 板倉町『板倉町史』考古資料編別巻 板倉町の遺跡と遺物 1989
- 橋本博文「亀甲繋鳳凰文象嵌大刀再考」「翔古論聚」1993
- 藤岡市教育委員会『年報』9 1994
- 西山要一・李 午憲・山口誠治「日韓古代象嵌遺物の基礎的研究」「青丘学術論集」第9集 1996
- 藤岡市教育委員会『平井地区1号古墳』1993
- 赤堀村教育委員会『吉沢峯古墳発掘調査概報』1985
- 赤堀村教育委員会『洞山古墳群及び北通・鷹巣遺跡発掘調査概報』1983
- 新田町『新田町誌』資料編(上) 1987
- 関邦一「銀象嵌表出作業におけるX線写真的応用とその成果について」「研究紀要」1 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- 高崎市教育委員会『山名原口II遺跡』1991
- 沼田市『沼田市史』資料編1 1995
- 邑楽町教育委員会『松本23号古墳発掘調査報告書』1989
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥二之堰遺跡』1985
- 藤岡市『藤岡市史』資料編 原始・古代・中世 1983
- 北橘村教育委員会『北橘村村内遺跡IV』1991
- 北橘村歴史民俗資料館展示パンフレット『鉄の文化史』1995
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団『清里・長久保遺跡』1986
- 富岡市教育委員会『上田篠古墳群・原田篠遺跡発掘調査報告書』1984
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団『少林山台遺跡』1993
- 神林淳雄「鉄装大刀と鉄製柄頭」「考古学雑誌」30巻3号 1940
- 末永雅雄「金錯銘直刀身」「考古学雑誌」56巻1号 1970
- 石井昌國・佐々木稔『古代刀と鉄の科学』1995

附表 群馬県内出土の象嵌装大刀地名表

表中の総は『上毛古墳綜覧』の略

名 称	所 在 地	遺 跡 名		象 嵌 遺 物		共 伴 遺 物	保管場所	挿 図	文 献
		概 要	種 類	概要(単位cm)					
1 台所山古墳	伊勢崎市波志江町台所山4125	円墳、30m舟形石棺	素環頭大刀一柄頭柄元金具 鍔 鞘口金具 鞘尻金具	文様不詳 亀甲繋文 巻手文 亀甲繋文 鋸齒文・波頭文		乳文鏡、鉄斧、刀子、 鉄鎌、埴輪	東京国立博物館	4図	1 2
2 總貫觀音山古墳	高崎市綿貫町字觀音山	前方後円墳97.5m、横穴式石室	振り環頭大刀一 鞘口金具 鞘尻金具 頭椎大刀 刀身	龍文と直線の区画内にC字状文		鏡2、直刀、銀製刀子 大帶胄、挂甲、玉類、 馬具、土師器、須恵器、 埴輪など	群馬県立博物館	3 4 7	
3 新領塚古墳	藤岡市白石字滝	円墳、約15m、横穴式石室	頭椎大刀 柄頭	亀甲繋文		須恵器、土師器	藤岡市教委		8
4	高崎市岩鼻町		円頭大刀 柄頭	長さ7.7、亀甲繋鳳凰文			東京国立博物館	5図-4	1・7・9
5	高崎市付近?		円頭大刀 柄頭	長さ8.0、亀甲繋鳳凰文			東京国立博物館	5図-2	1・7・9
6	伝高崎市付近		円頭大刀 柄頭	長さ7.0、亀甲繋鳳凰文					7・9
7	藤岡市本郷		円頭大刀 柄頭	長さ7.2、亀甲繋鳳凰文			東京国立博物館	5図-3	1・7・9
8 平井地区1号古墳	藤岡市三ツ木字東原	円墳、30m横穴式石室	円頭大刀 柄頭 鍔 鑑	長さ7.8、亀甲繋鳳凰文 (単鳳) 弧状文 龍文?		金銅装单鳳環頭大刀、 直刀、金銅製耳環、挂 甲小札、鉄鎌、刀子、 弓飾り金具、鉄鎌、鉄 斧、鉄鑿、馬具、須恵 器、埴輪	群馬県立歴史博物館	5図-7	10
9 総赤堀村248号墳	赤堀町今井字吉沢峯1023	円墳 横穴式石室	円頭大刀 柄頭	長さ8.5		金銅装大刀、刀子、鉄 鎌、馬具、金銅製耳環 金銅製中空耳環	赤堀町教委		11
10 総赤堀村40号墳	赤堀町五目牛38	円墳、25.6m、横穴式石室	円頭大刀 柄頭?	長さ4.2、文様不明		小刀、刀子、方頭大刀 柄頭?、金銅製耳環、 鉄鎌、ガラス小玉158、 土師器甕	赤堀町教委		12
11 総木崎町8号墳か	新田町神明		円頭大刀 柄頭	長さ6.5、亀甲繋鳳凰文 (単鳳)			新田町教委	5図-6	13・14
12 総綿打村3号墳か	新田町大根		円頭大刀 柄頭	長さ7.3、亀甲繋鳳凰文 (双鳳、一部に単鳳)			個人蔵	5図-5	13
13 筑波山古墳	板倉町岩田字風張2498	前方後円墳55m、横穴式石室	円頭大刀 柄頭 鍔 刀身	長さ9.1、亀甲繋鳳凰文 (単鳳) 長径8.6、8窓、平に圈線 とC字文、耳にもC字文 鑑本孔周辺に連弧輪状文 小片2点		金銅製耳環、銀製耳環 水晶製切子玉、瑪瑙製 勾玉、馬具、鉄鎌	板倉町教委	5図-1・ 8~10, 6図-1	5・6
14 山名原口II遺跡2号墳	高崎市山名町字原口	円墳、16.5m、横穴式石室	円頭大刀 柄頭ある いは鞘尻 金具 鍔	長さ6.8、鱗状文 長径8.0、8窓、耳にあり、 文様不明		ガラス小玉、土製玉、 水晶製切子玉、勾玉、 管玉、垂飾品、金銅製 耳環、挂甲小札、刀子 馬具、鉄鎌、須恵器	高崎市教委		15
15 秋塚3号墳	沼田市秋塚町字前原	円墳 横穴式石室	鞘尻金具	長さ5.5、火炎文?		直刀、方頭大刀、鉄鎌 留金具、金銅製耳環、 瑪瑙製勾玉	沼田市教委	5図-11	16

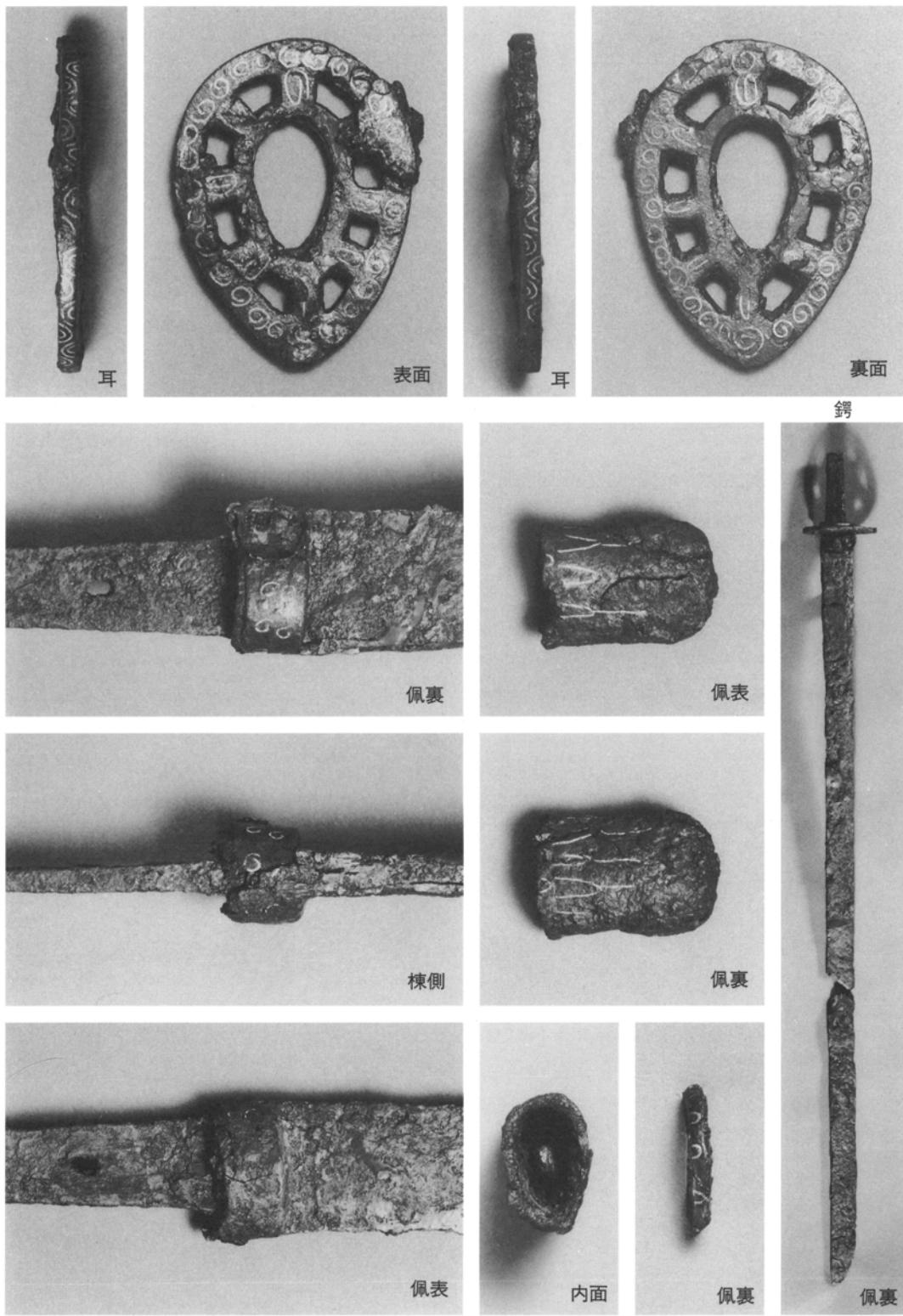
	遺 跡 名			象 嵌 遺 物		共 伴 遺 物	保管場所	攝 図	文 献
	名 称	所 在 地	概 要	種 類	概要 (単位cm)				
16	佐波郡東村大字東小保方字下谷386			鞘尻金具 鈔 鎚 鍔	長さ4.3、鱗状文 長径6.5、無窓	滑石製品勾玉、金銅製耳環、直刀 6、金銅製刀装具、鉄鎌	東京国立博物館	5図-12	19
17	松本23号古墳 邑楽町大字中野字大根村1310	円墳、12m 横穴式石室		柄縁金具 鎚 鞘尻金具	長径7.5、8窓、平に渦文、耳には二重半円文 半円文 渦文 長さ4.5、羽状文	直刀、鉄鎌、金銅製耳環、埴輪	邑楽町教委	3図	17
18	荒砥二之堰遺跡 2号墳 前橋市飯土井町字二之堰	円墳、15m 横穴式石室		鍔	長径7.8、6窓、平は渦文、耳は二重半円文	刀子、須恵器	群埋文	6図- 9	18
19	ローソク山古墳 (総倉賀野町19号墳) 高崎市倉賀野町大字倉賀野駅字宮ノ前134	円墳		鍔 1 鍔 2	長径9.0、8窓、平に渦巻文、耳の文様構成は不明 長径8.2、8窓、平に圓線とC字状文、縦線文耳の文様構成は不明	直刀、鉄鎌、金銅製耳環、鉄製耳環、勾玉、切子玉	東京国立博物館		1
20	伝高崎市倉賀野町付近			鍔	長径8.4、8窓、平に圓線とC字状文、耳にもC字状文		東京国立博物館		1・7・9
21	伝高崎市倉賀野町付近			鍔	長径8.4、8窓、平に圓線とC字状文、反対面には波状文、耳は直線とC字状文		東京国立博物館	6図-10	1
22	伝高崎市倉賀野町付近			鍔	長径8.5、12窓、平は片面のみに波状文を重ねる、耳の文様は不明		東京国立博物館		1
23	高崎市倉賀野町大応寺			鍔? 縁金具 か	長径4.6、耳のみあり、文様構成不明	直刀 2、鍔 2、鉄鎌	東京国立博物館		1
24	高崎市倉賀野町大道南			鍔	長径7.4、8窓、耳のみあり、文様は不明	直刀 2、刀子、耳環、鉄鎌	東京国立博物館		1
25	高崎市岩鼻町 (陸軍省火薬製造所構内)			鍔	長径7.0、6窓、平に圓線とC字状文、透孔間にてもC字状文		東京国立博物館	6図- 7	1・7・9
26	綿高崎市 233号墳 高崎市江木町稻荷廻783 (旧地番)	円墳、16m		鍔	長径7.7、8窓、文様不明	頭椎大刀、直刀 3、刀子、鉄鎌、耳環、須恵器	東京国立博物館		1
				縁金具	文様不明				
27	綿桐生市 2号墳 (三ツ塚古墳) 桐生市錦町 2丁目 1292- 2	円墳、約7.5m		鍔	長径6.1、無窓、平に渦文が2列	頭椎大刀、金銅製耳環 銀環	東京国立博物館	6図- 5	1・7・9
28	綿殖蓮村251号墳 (29墳か) 伊勢崎市豊城町権現前1955			鎚	波状の文様		東京国立博物館		1
29	伊勢崎市 (旧殖蓮村)			鍔	長径5.8、無窓、平に圓線とC字状文、耳の文様構成は不明	直刀、鍔	東京国立博物館	6図- 2	1・7・9
				鎚 刀身	文様不明				
30	諏訪神社北古墳 藤岡市藤岡字東裏	円墳、25m 横穴式石室		鍔	長径10.6、10窓、平はハート形文?、耳には波状の文様	直刀 (銅製吊り金具付き)、鉄鎌、手斧、銅鏡			19
31	伝藤岡市三本木			鍔	長径8.0、13窓、耳のみ、文様構成不明		東京国立博物館		1
32	渋川市石原付近			鍔	長径9.8、12窓、耳のみあり、文様構成不明		東京国立博物館		1
33	秋塚10号墳 沼田市秋塚町字前原	円墳、8 m 横穴式石室		鍔	長径6.0、無窓、ハート形文	刀子	沼田市教委	6図- 6	16
34	安中市安中字下野尻内城下645			鍔 鎚	長径6.3—文様不詳	直刀 5、鍔 2、水晶製勾玉、滑石製勾玉、水晶製切子玉、軟玉製管玉、銅釧、金環、銀環、鉄環	東京国立博物館		1

	遺 跡 名		象 嵌 遺 物		共 伴 遺 物	保管場所	挿 図	文 献
	名 称	所 在 地	概 要	種 類	概 要 (単位cm)			
35	八幡塚古墳	北橘村大字真壁字八幡	円墳	鍔 鏡	長径8.9、8窓、平は渦文、耳には半円文	直刀、土師器、須恵器	北橘村教委	6図-3・20
36	水泉寺3号墳	北橘村大字真壁	円墳	鍔 鏡	ハート形文 側面と塞ぎにあり		北橘村教委	12 21
37	ホウリウ塚 (綜吉井町67号墳)	吉井町大字本郷字石橋432	円墳、12m	鍔	長径10.8、8窓、平は圓線とC字状文、耳は直線とC字状文か	刀子、勾玉、棗玉	東京国立博物館	1
38		群馬県出土		鍔	長径10.0、8窓、耳にのみ、直線文とC字文		東京国立博物館	1
39		伝群馬県		鍔	長径6.2、無窓、ハート形文 側面にハート形文			6図-4 25
40	清里長久保古墳群7号墳	前橋市池端町	円墳、12m 横穴式石室	鏡 鏡	C字状文と直線文	直刀2、鍔2、小刀、 鐵鑄、ガラス小玉、瑪瑙製勾玉、棗玉、須恵器、土師器、埴輪	群埋文	6図-11 22
41		高崎市綿貫町字市ヶ原		鏡	文様不明		東京国立博物館	1
42		高崎市綿貫町(陸軍省火薬製造所構内)		鏡	側面と塞ぎにあり 文様不詳			1
43		高崎市綿貫町(陸軍省火薬製造所構内)		鏡 刀身	縦線とC字状文2列 鏡本孔の周辺に連弧輪状文		東京国立博物館	1
44		藤岡市付近		鏡			東京国立博物館	1
45	上田篠古墳群2号墳	富岡市田篠諏訪平・原町	円墳、18m 横穴式石室	鏡	対向する半円文	直刀2(うち1振りは金銅装)、鐵鑄、耳環(銅環に金張、銀環)	富岡市教委	6図-8 23
46	少林山台遺跡7号墳	高崎市鼻高町字台	円墳、15.3m、横穴式石室	縁金具	半円文?	直刀3以上、刀子、ガラス小玉、埴輪	群埋文	6図-13 24
47	少林山台遺跡14号墳	高崎市鼻高町字台	円墳、横穴式石室	縁金具	半円文?	刀装具、金銅製耳環、弓飾金具、ガラス小玉、鐵鑄、須恵器、土師器	群埋文	6図-14 24
48		高崎市旧佐野村		直刀刀身	鏡本孔周辺に連弧輪状文		東京国立博物館	1・7
49		群馬県内		直刀刀身	刀長77.5 金錯銘		東京国立博物館	26
50	伝太田天神山古墳	太田市		直刀刀身	刀身92.5 雲龍文		個人蔵	27

群埋文は群馬県埋蔵文化財調査事業団の略

掲載図面出典

- 4図 附表の参考文献・引用文献一覧の文献2掲載図から作図
- 5図-1 文献6掲載図から作図
- 2 文献9掲載図から作図
- 3 神林淳雄資料(國學院大学蔵)から作図
- 4 神林淳雄資料(國學院大学蔵)から作図
- 5 文献13掲載図から作図
- 6 文献13掲載図から作図
- 7 文献10掲載図を転載
 - 7-A・C 文献10掲載図から作図
 - 7-B 文献10掲載図から作図
- 8~10 文献6掲載図から作図
- 11 文献16掲載図から作図
- 12 文献9掲載図から作図
- 6図-1 文献6掲載図から作図
- 2 文献9掲載図から作図
- 3 文献20掲載図から作図
- 4 文献25掲載図から作図
- 5 文献9掲載図から作図
- 6 文献16掲載図から作図
- 7 文献9掲載図から作図
- 8 文献23掲載図から作図
- 9 文献18掲載図から作図
- 10 文献9掲載図から作図
- 11 文献22掲載図から作図
- 12 文献20掲載図から作図
- 13 文献24掲載図から作図
- 14 文献24掲載図から作図



鉢とその周辺

鞘尻金具

柄縁金具

刀身